

びわこ文化公園植物だより〔β 版〕

びわこ文化公園のタンポポ類 キク科



ならんで咲くカンサイタンポポ(左)と
セイヨウタンポポ(右)

タンポポは子どもたちが大好きな花です。幼稚園や保育園に「たんぽぽ組」があるのがその証拠でしょう。そのタンポポに日本在来種と外来種があるということをご存知の方も多いと思います。びわこ文化公園ではいま、どちらがどれくらい生えているのでしょうか？

まず在来タンポポから見ていくと、滋賀県南部で見られるものはカンサイタンポポとシロバナタンポポの2種です。シロバナタンポポは名前のとおり白い花を咲かせるタンポポです。九州にはふつうにあるそうですが、滋賀県南部ではかなりめずらしく、特にびわこ文化公園敷地内では私はまだ見つけていません。公園内で多くみられる在来タンポポはカンサイタンポポなので、以下ではカンサイタンポポと外来タンポポの比較に的を絞ります。

黄色い円盤のように開いたタンポポの「花」と呼ばれるものは、厳密にいうとたくさんの小さな花が密集したもので、専門的には「頭状花序」といいます。細長い花びらのようなもの一つ一つが、ほんとうの1個の花に相当します。そして、この「頭状花序」の下半分を包む緑色の受け皿のようなものは、がくではなく「総苞」(そうほう)といえます。総苞はたくさんのりん片でできており、そのりん片のひとつひとつを「総苞片」といいます。これで、最低限必要な用語の準備ができました。

タンポポの総苞片は瓦のように2重か3重になりますが、その一番下の列のものが上向きにぴったりとくっついているものが在来タンポポ(当地ではカンサイタンポポ)で、それがそり返って横や下を向いているものが外来タンポポ、というのが見分けの基本になります。ただし、ことはそれほど単純ではありません。



カンサイタンポポとセイヨウタンポポの総苞片の比較。カンサイタンポポ(左)では総苞片の外側(下方)の列が内側(上方)の列の下部にぴったりと貼りついている。セイヨウタンポポ(右)では総苞片の外側の列がそり返って下を向いている。右の写真はまだつぼみだが、この特徴は花が開いても同様。

明治時代に日本に急速に広がった外来のタンポポはセイヨウタンポポと名づけられました。後になって、セイヨウタンポポによく似た別種も帰化していることがわかりました。あとから気づかれたほうは「アカミタンポポ」と名づけられました。タネの色が赤みをおびているからです。アカミタンポポはセイヨウタンポポより一回り小さいことが多いですが、大きさは栄養状態によっても変わるので、それだけではわかりません。そり返った総苞片の形もよく似ています。総苞片がそり返ったタンポポがセイヨウとアカミのどちらであるかは、最終的には、熟して綿毛が開いたタネの色を見なければ確定できません。



セイヨウタンポポ(左)とアカミタンポポ(右)
の成熟した果実。これらはどちらも外来種。

話はまだ終わりではありません。明治時代以来、猛威をふるったセイヨウタンポポは、現在、滋賀県内で見ると限り、勢力が衰えているようです。変わって勢力を伸ばしているのは、在来とも外来ともつかない謎のタンポポなのです。おそらく、在来タンポポと外来タンポポの雑種ではないかと考えられています。このようなタンポポはまだ図鑑にもものっていないか、のっていたとしても正式な名前がついていません。



びわこ文化公園内で主流になりつつある、正体不明のタンポポ。総苞が大きくお椀型のもの(左)から、総苞片が上から下までばらばらの方向を向いているもの(右)まで、総苞の形はいろいろ。既知のカンサイタンポポ・セイヨウタンポポ・アカミタンポポと比べて頭状花序が大きく花茎も太い。

これらのタンポポはでたらめに入り混じって生えているわけではなく、それぞれ好む環境がありそうです。

カンサイタンポポは環境が昔から変わっていない草地を好むようです。夕照の池の北にある梅林はカンサイタンポポが多く残っているところです。

アカミタンポポはそれとは逆に、道路の舗装のすき間や石垣のすき間など、灰色の都市的な環境を好むように見えます。舗装道路沿いで小ぶりなタンポポを見つけたら、綿毛のついたタネをさがして、色を確認してみてください。

ほかのタンポポ類はどんな場所にあるでしょうか？

〈参考文献〉

保谷彰彦『タンポポハンドブック』。文一総合出版、2017年。

(龍谷大学農学部・三浦励一)